

「イエス様の言葉への信頼」

ヨハネによる福音書 4 章

46 イエスは、再びガリラヤのカナに行かれた。そこは、前にイエスが水をぶどう酒に変えられた所である。さて、カファルナウムに王の役人がいて、その息子が病気であった。

47 この人は、イエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞き、イエスのもとに行き、カファルナウムまで下って来て息子をいやしてくださるように頼んだ。息子が死にかかっていたからである。

48 イエスは役人に、「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」と言われた。

49 役人は、「主よ、子供が死なないうちに、おいでください」と言った。

50 イエスは言われた。「帰りなさい。あなたの息子は生きる。」

その人は、イエスの言われた言葉を信じて帰って行った。

51 ところが、下って行く途中、僕たちが迎えに来て、その子が生きていることを告げた。

52 そこで、息子の病気が良くなった時刻を尋ねると、僕たちは、「きのうの午後一時に熱が下がりました」と言った。

53 それは、イエスが「あなたの息子は生きる」と言われたのと同じ時刻であることを、この父親は知った。

そして、彼もその家族もこぞって信じた。

54 これは、イエスがユダヤからガリラヤに来てなされた、二回目のしるしである。

この話はイエス様の「2 回目のしるし」として描かれています。

「しるし」というのは「意味や目的のある奇跡」と言われています。

つまり、そこから大切な何かを教えようとする役目をになった奇跡ということです。

場所はガリラヤ。カファルナウムにいた王の役人とイエス様が主人公です。

「カファルナウムまで下って来て息子を癒してくださるように」とありますが、これは地理的關係からの言葉です。

カナの標高は海拔約 450 メートル、カファルナウムはガリラヤ湖の湖畔にある町で、海拔約マイナス 180 メートル。

その 標高差は約 630 メートル。そしてカナからカファルナウムまでは距離約 32 km、下りのルートなので

さて、役人はイエス様に「カファルナウムまで下って来て息子をいやしてくださるように頼んだ」とありますが、イエス様はそれに対して「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」と応答しました。役人がそうだというわけではなく

一般的に多くの人たちがしるしや不思議ばわざを見なければ決して信じないと言われたのです。これは大きなチャレンジです。

あなたもそうですか？という意図がここにあるからです。

実は、この問題は、イエス様が荒れ野で悪魔からの誘惑を受けた時の質問の中に潜んでいましたね。

「石をパンに変えてみる、そうしたら信じてやる」というようなやりとりはイエス様がどこの街に行っても同じような雰囲気を感じたチャレンジだったと思います。

でも、その背景には「見せてくれたら信じてやる」という人間の神様に対する思い上がりがあるのです。神様のほうが立場が下になっています。これは本末転倒です。

役人は真剣に「主よ、子供が死なないうちに、おいでください」とイエス様に懇願しています。

この発言には、親として真剣な「息子への愛」と「イエス様への必死の嘆願、つまりイエス様がきてくださったら、そこに

いてくださり、そこで言葉をかけてくださったらきっと息子のいのちは助かります」という信仰表明が含まれています。

イエス様だけが頼りで、イエス様の存在と言葉だけが希望なのです、という意識が表されています。

それに対して、イエス様は「帰りなさい。あなたの息子は生きる。」と伝えました。

私たちはいわば、言葉の軽い世界に生きています。言葉をそのまま信じ難い世界です。自分の体験に基づかず、知識や他者の言葉をそのまま受け売りのように語ったり、裏付けもなく、思いつきの約束だったり、言葉でがっかりさせられる事が案外多い世界です。おそらく昔もそういう空気はあったかもしれませんが、情報過多の現代社会ではそれがさらにひどくなっているように感じます。

イエス様の言葉は、ひとつひとつが大変重い。

よく「権威ある言葉」と表現されていますが、その存在と行動によって裏打ちされた言葉であり、ヨハネによる福音書の最初に「はじめに言葉があった」と書かれているように、イエス様は神様の言葉そのもの、神様の心そのものなのです。

役人はイエス様の「帰りなさい。あなたの息子は生きる。」という言葉を受けて帰りました。

そこに希望を託して帰りました。

もし、あなたがこの役人だったら、どういう反応を示すでしょう。「え、来てくれないのですか」「え、何かやってくれないのですか。こんなに真剣に頼んでいるのに・・・」というものにならないでしょうか。

おそらく役人は困惑を感じながらも、イエス様が「あなたの息子は生きる」と言われた言葉を信頼し、希望をもって

帰りました。

そして、帰り道でもべたちから良い知らせを耳にすることになります。

それは息子が生きているというニュース、しかも、それが明確になったのは、イエス様が彼に語ったその時間だった

ことに気付かされます。

イエス様の言葉は「時空を超え」「場所に支配されず」その心通りに実現します。

さて、私たちはイエス様の言葉に希望を感じているでしょうか？聖書を読む時、ただただ釈義だけに心を捉えられてはいないでしょうか。

イエス様が、聖書の言葉一つ一つから、私たちに何かを訴え、何かを教え、何かを促してくださっていることに

心を向けているでしょうか？

釈義は大切ですから、決して疎かにすべきではありません。

意味をわかろうとする努力は大切です。

しかし、同時に、釈義を超えて、み言葉そのものから、伝わってくる、あなたへの個別の訴えや促しもきっとあるはずなのです。

だからこそ、個人個人が聖書を読む必要があり、時間を切り分けて「聖書の言葉に向き合う必要」があるのです。

イエス様は、聖書の中に例話や格言のような言葉からも、あるいは、単語一言からも、あなたに神の言葉を届けようとしておられます。聖書に向かう時「読みながら、聖書の言葉が祈り」になるように読む姿勢や初めてこの言葉に出会うような意識で読む事が大事です。心の中で「感じ取れるみ言葉」と出会えると思います。

わかったつもりで読むことはとても危険です。

聖書の言葉をとおして、個別に語られているイエス様からのメッセージを聞き逃さないようにしたいですね。そして、その信仰姿勢こそ他者の心を動かす力を秘めているのです。

* * * *

* 11月30日もYoutubeでの礼拝です。OCCでのMACFの礼拝は12月7日です。午前10時からです。

もうクリスマスのメッセージになります。

* * * * *

youtubeでの礼拝説教はこちらです。

<https://youtu.be/7jaOC-Zt4tQ>